

## 長崎県における離島教育の現状と

### 地域を生かした離島教育への提言

森下浩史，松園光代（長崎大学教育学部）

岩永祥子（佐世保市立相浦西小学校）

#### はじめに

多くの離島を抱える長崎県では、退職までに必ず一度は離島で勤務することを教職員に義務付けている。離島での教育・生活には島のマイナスイメージが付きまとうが、実は、都会の学校にはない豊かな環境と教育条件が離島には備わっている。離島ならではの良さを生かし離島の環境をプラス思考に捉えることができれば、心豊かで充実した離島教育・生活ができると考える。

都市部では地域の中での人間関係が希薄化しているのに対して、離島では今でも地域の中で住民同士の関わりは深く暖かい。子どもたちにとって限定された地域に住む人々は互いに顔見知りで、厚い信頼関係で結ばれた人的環境に恵まれた大人集団である。離島の学校においては、島の魅力である地域の環境を生かすこと、つまり地域住民との連携を強化し、自然環境を教育の中に取り入れ活用することが常日頃から行われている。本報告では、大自然の中で厚い信頼で結ばれてきた島民の営みを基盤とした地域力を生かし、課題が多いとされる離島教育に対してより一層充実したものにしていくための手立てを提起したい。

#### 1 離島の現状

平成 20 年 4 月現在 261 島の有人島が離島振興法による離島振興対策実施地域に指定されている。対象地域の総人口は表 1 に示す通りで、長期間に亘り減り続けている。離島地域では 65 歳以上の高齢人口の割合が大きく、この問題の対応が緊急の課題となっている。長崎県でも各離島の人口は昭和 35 年をピークとして減少している（表 2）。離島地域の産業別の人口構成では、農林水産業など第 1 次産業の割合が大きい。人口減少の背景には、高度経済成長期における大都市への人口流出などの社会情勢のほか、離島産業の重要な役割を果たしてきた第 1 次産業の衰退もその要因の一つとなっている。

表 1 離島人口の推移(昭和 35 年～)<sup>1)</sup>

	離島人口(5年前との比較)
昭和 35 年	923,062(—)
昭和 40 年	837,949(−9.2%)
昭和 45 年	736,712(−12.1%)
昭和 50 年	666,341(−9.6%)
昭和 55 年	630,538(−5.4%)
昭和 60 年	597,487(−5.2%)
平成 2 年	546,505(−8.5%)
平成 7 年	509,105(−6.8%)
平成 12 年	472,312(−7.2%)
平成 17 年	433,712(−8.2%)

## 2 離島の子どものための教育環境

五島列島の場合、高等学校への進学率は20年前の時点で島外の高校と島内の高校の両方を合わせて約8割であった<sup>3)</sup>。最近の離島地域の新規高卒者の島外流出状況を表3に示す。

表2 長崎県の離島人口の推移<sup>2)</sup>

	昭和35年	昭和50年	昭和60年	平成7年	平成17年
対馬島	69,556	52,472	48,875	43,513	38,481
壱岐島	50,497	41,871	39,528	35,089	31,414
平戸諸島	39,136	23,730	19,579	16,507	12,762
五島列島	144,016	104,277	93,741	81,140	69,804
西彼諸島	36,856	19,097	15,904	7,331	3,153
合計	340,061	241,447	217,627	183,580	155,614

離島では人口減に伴って学校の統廃合や複式学級数が増えている。平成20年の調査によると、県内の小学校における複式学級数<sup>4,5)</sup>は215学級である。地域によってその割合を異にするが、長崎県全体の全学級数に対する複式学級数の比率は5.8%である。

表3 新規高卒者の動向調査<sup>3)</sup>

	卒業年月	卒業人数	島外へ出た割合
対馬島	平成7年3月	523	82.0%
	平成12年3月	470	84.9%
	平成19年3月	360	86.1%
壱岐島	平成7年3月	545	74.3%
	平成12年3月	464	81.7%
	平成19年3月	364	88.5%
平戸諸島	平成7年3月	181	97.8%
	平成12年3月	142	94.4%
	平成19年3月	103	99.0%
五島列島	平成7年3月	1,106	88.0%
	平成12年3月	943	90.0%
	平成19年3月	822	94.0%
西彼諸島	平成7年3月	116	95.7%
	平成12年3月	69	88.4%
	平成19年3月	0	—

離島と本土との格差をなくし、住民生活の経済力の培養と島民生活の安定を図るための補助率の増加、融資の施策、教育の充実を目的とした離島振興法に基づき、長崎県離島振興計画<sup>6)</sup>が定められている。本県の

島々は我が国の領域、排他的経済水域の保全、海洋資源の利用、自然環境の保全等に重要な役割を果たしている。また、原の辻遺跡、元寇史跡、遣唐使・朝鮮通信使など中国や朝鮮半島との豊かな交流の足跡が、歴史的資産として残されており、今日にあっても東アジアとの国際交流拠点としての役割を担っている。さらに、これら諸離島の周辺水域には豊富な水産資源があり全国有数の水産物供給基地の役割や、心や体の癒しの場としての役割を担っている西海国立公園・壱岐対馬国立公園等の自然環境を備えている。これらの各島がもっている誇れる特有の有形無形のことを、是非とも教育の中に組み入れるべきだと考える。

学校・地域が一体となった生涯学習の体制づくりは、児童・生徒数の減少による余裕教室を社会教育施設（生涯学習の拠点施設や地域住民による学校支援の活

動拠点施設)として転用できれば、直ぐにでも取り掛かれそうだ。また、離島の子ども達の主体的行動の形成という観点から、離島の豊かな自然環境・景観等を生かした環境学習を推進し、環境指導者の養成や環境体験学習を中心としたエコツアーリズムなどの事業を助成し推進すれば、都市部の学校とも広く交流できそうだ。

教育の分野にスポットを当てて述べると、島の魅力は自然環境と人情にある。交通の便などが不利な状況の中で、学校と協同し合いながら島民や子どもたちに地域の特性と地域の良さを心底理解して誇りに思ってもらうことが、離島教育における持続的な発展に結びつくと考える。

### 3 離島に住む子どもの特徴

離島という環境の中で育ってきた子どもたちに対して、本土の子どもたちとは少し異なった特徴が挙げられる場合がある。離島の児童生徒の特徴について、離島・へき地の教育に携わっている教師を対象に行われた原田等<sup>7)</sup>によるアンケート調査結果によると、次の4つに分類(①集団場面での消極的・スキルの不十分さ、②明るさ・人なつっこさ・素朴さ、③基本的学習・生活習慣の不十分さ、④固定的少人数集団生活による負の側面)されている。それぞれの項目について、離島で育ち生活をしてきた(教育支援で足しげく離島に通った)我々の経験から、先のアンケート調査報告<sup>7)</sup>にコメントを加えてみたい。

#### ①集団場面での消極的・スキルの不十分さ

離島の子どもは表現力が低いとされるが、当然全ての子どもの表現力が低いというわけではない。集団の中で表現する場が少ない離島の環境が、表現力の低さに繋がると考えられるが、離島の中にも表現力豊かで人前が出るのが得意な子どももいる。リーダーシップが取れない子が多いとした点については、我々の経験からして納得がいかない。この点について、我々は独自にアンケート調査することにした(結果については表4に掲載)。

#### ②明るさ・人なつっこさ・素朴さ・親密さ

人なつっこさについて、本土の子どもたちに比べて離島の子どもたちは地域の行事などに関わる事が多く、地域の大人たちとも互いに顔見知りであるために、人なつっこく見えるのであろう。

親密さについては、人口の少ない離島の学校ではクラス替えもなく、同じメンバーでずっと小学校生活を送る。幼稚園から高校まで同じ学校に通う子どもも少なくはなく、親密になるのは当然である。ただ、このことは子どもたちにとって良いことばかりだとは言えない。進学や就職を機に多くの子どもたちは島を出て行く。その時、限られた人間関係の中での経験だけでは、他人と関わる力が十分に培われない。マイナス面に働く場合もある。例えば、言葉づかいについて、子どもたち同士が親密であるが故に馴れ合いの中で言葉が乱れていってしまう。教師に対しても敬語を使わないで、まるで友達に話すように話しかけてしまう。将来的にこのことを少し考えたとき、敬語を使えない大人に育ってしまう可能性が

ある。いかに親しい関係であっても、けじめをキチンとつけた関わりを持たせなければならぬと考える。

### ③基本的学習・生活習慣の不十分さ

離島の子どもは基礎学力の不足や学習意欲が低いとされている。受験競争を背景として友達と切磋琢磨しながら身につく学力や意欲もある。しかし、本来地域に根ざした教育を背景とする離島の学校では、受験競争に基づいた教育効果は求められてこなかった。家庭学習の習慣が定着していないといわれる点についても、これは保護者の旧来からの教育に対する考えがあるからである。離島では今でも教師を尊敬する傾向が強く、学校の勉強は学校で行うものという雰囲気根付いている。このような考えが根本にあって、家庭では学校で取り扱う学習内容の復習や予習に力を入れる習慣が一般的に定着していないのである。従って、一概に離島の子どもの基礎学力や学習意欲が劣っていると判断するのは当たっていない。

### ④固定的少人数集団生活による負の側面

固定的少人数集団生活が強いられることは人口流出の進む離島では避けられない。固定化された少人数集団生活が生み出す負の側面は、離島で育つ子どもたちにとって一番のデメリットである。物事に対してのみならず考え方や視野も限られたものになってしまう。決まった少人数集団の中で生活する子どもたちには他人と関わる力が育ちにくいだろう。しかし、固定的な少人数集団だからこそ児童生徒同士の親密さ、信頼関係、相手を思いやる気持ちや家庭的雰囲気生まれることに関しては、負の側面ばかりとは言えない。

島の子どもの特徴という点、どうしてもマイナスの教育的側面が多く挙げられる。過疎地域に基づくこの瑕疵的側面については、地域住民の人的環境や自然環境を教育の中に生かすように努力することで十分に補うことができると考える。子どもたちには離島で育ったことを誇りに思い、自信に満ちた人生を送ってもらえる教育を是非とも授けたい。

## 4 現在離島の小学校に勤務する教師から見た島の子どもの特徴

離島の児童生徒の特徴に関する幾つかの項目について、長崎県の離島の小学校に勤務する教師を対象にアンケート調査を行った（2009年11月実施）。五島市S小学校、新上五島町WT小学校、対馬S小学校・T小学校、壱岐M小学校の小規模小学校5校にアンケートを依頼した。依頼した全校、31人の教師からの回答を得た。以下に、質問内容と回答結果をそれぞれ示す。

表4 アンケート調査結果（離島の子供の特徴）

質問内容事項	思う	思わない	どちらでもない
1 教師への依存度が大きいのか？	23人	5人	3人
2 社会性が身に付いていないのか？	15人	8人	8人
3 人間関係が固定化されているのか？	27人	2人	2人
4 表現力が低いのか？	18人	6人	7人
5 物事に対して消極的であるのか？	9人	14人	7人

6 リーダーシップが取れない子どもが多いか？	9人	7人	15人
7 集団行動が苦手であるか？	4人	<u>23人</u>	4人
8 学習意欲が低いのか？	5人	<u>19人</u>	7人
9 生活体験や自然体験が豊富であるか？	10人	11人	10人
10 子ども同士が親密であるか？	<u>24人</u>	3人	4人
11 素朴で素直であるか？	<u>27人</u>	1人	3人
12 協調性があるか？	14人	4人	13人

※その他、離島の子どもたちの特徴について、自由記述で寄せられた意見を示す。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども本来の純粋さが感じられ地域・家族・学校の一体感があり、学校教育の及ぼす力は都市部よりも大きく感じる。</li> <li>・率直で素朴、青雲の志が低い。</li> <li>・テレビの影響が大きい。</li> <li>・語彙が少ない。ケンカをしない。</li> <li>・狭い島での生活が中心なので、生活経験が乏しい。また家族で行う季節的な行事も経験が少ないので、できるだけ学校で体験させている。</li> <li>・全てにおいて生活経験の不足を感じる。</li> <li>・保護者の教育に対する関心が低く、生活習慣も身に付いていない。学習以前に指導することが多い。学力も低い。</li> <li>・素朴で素直な面を大いに伸ばして離島の子どもたちの良さを誇りにさせたい。</li> </ul> <p>など</p>
---

※以上のアンケート結果について考察した事柄を、以下に示す。

アンケートの結果は、予想していたことと異なる点が幾つかあった。島の子どもに対するマイナスイメージの質問「物事に対して消極的である」「リーダーシップが取れない子が多い」「集団行動が苦手である」「学習意欲が低い」について、「思わない」あるいは「どちらでもない」と我々の予想に反した答えが多かった。「人間関係が固定化されている」については、離島の人口などの状況から仕方のないことだが、離島の子どもだからといって必ずしもこれらの項目が当てはまるわけではない。人前で表現するのが得意な子どもやリーダーシップが取れる子どももいて、現実的には流動的な友だち付き合いが行われている。特に、離島の子どもが「消極的である」という点については、今回得られたアンケート結果がこの事実を否定しているように、我々が直接受けた経験からしても島の子どもが消極的だとは感じない。実際に何度か離島の小学校に赴き教育支援に携わったが、子どもたちはとても「明るく積極的」に学習活動などにも励んでいた。

今回のアンケート結果から、実際に離島で働く教師が総じて、必ずしも島の子どもたちに対してマイナスイメージの多くを持っているわけではないことが分かった。

## 5 離島の小学校における教育実践現場の環境

長崎県の離島の教育現場状況のメリット・デメリットについては先に詳しい報告<sup>7)</sup>がある。この報告に述べてある「ゆとりある教育実践について」および「不

「利な教育環境について」の項に関連して、幼小中高校と離島教育を実際に受けてきた経験を踏まえてコメントしたい。

「学校では質問も沢山できたし、一人でも分からないところはじっくりと教えてもらうことができた。」の弁に示されるように、離島の教育現場におけるメリットは、少人数であるために教師が児童個人に関われる時間や一人当たりの子どもに割ける時間にゆとりがあるということがある。これは子どもたちにとってとても大きなメリットである。理科の授業で使う道具や器具も一人ひとりの子どもに十分に行きわたらせるなど、子どもたちの個人差に合わせた指導がゆったりと行える。それぞれの子どもをつまづきにも丁寧に対応できる。

離島における不利な教育環境として、「保護者の教育に対する理解が得にくく教師任せの部分が多い」「地域全体が子どもに対して甘いところがある」という報告判断については若干意義を申し述べたい。「教師任せの部分が多い」というのは、離島ではまだまだ教師を尊敬する意識が大きいし、勉強は学校でするものだという考えが根強い。この点で、教師任せの部分が多いと映るのは仕方ない。しかし、「保護者の理解が得られない」「地域が子どもに対して甘い」ことに対しては、学校として真摯に再考して、「保護者の理解が得られる」「地域が子どもにキチンと対応する」ように指導すべきと考える。離島では保護者や地域との連携が取りやすく、保護者や地域の理解と協力は欠かせない重要な事柄である。教師自身がこのように実際に感じているのであるならば、保護者や地域の理解が得られるように、さらに前向きに努力し工夫することが必要であると、苦言を呈したい。また、「基礎学力が不足している」という意見は、何をもってその様な意見が出てくるのか、その根拠がよく分からない。もし、離島の子どもたちの基礎学力が低いのであるのならば、そもそもそれは学校自身が責任を持って取り組んで対応していかなければならない事柄である筈だ。

「複式の学習指導が複雑で困難である」との意見に関しては、離島では避けられない課題である。子どもの数が少なくても、複式学習であれば時間的な余裕があるとは言えない。教科ごとの専科の教師も少ない離島で複式学級を運営することは、教師にとって大きな負担である。教材・教具に関しての不便さも想像ができることから、実際にどのような点が不便であると感じているのか、以下アンケートで尋ねることとした。

※離島の小学校に勤務する教師が、教育実践現場でどのようなことを感じているのか、アンケートにより調査した（2009年11月実施）。以下、質問内容と回答結果を示す。

質問1 小規模校・少人数学級のメリット、デメリットだと感じるところは何ですか？

(メリット)

- |                  |     |           |     |
|------------------|-----|-----------|-----|
| ①個別指導が行いやすい      | 29人 | ②個性が伸長できる | 10人 |
| ③指導に手がかからない      | 4人  |           |     |
| ④その他             |     |           |     |
| ・家庭や地域との連携が密にとれる |     |           |     |

・児童理解が行いやすい

(デメリット)

①協同学習の実践が困難 19人      ②練り合いができない 20人

③馴れ合いが過ぎる      7人

④その他

- ・多様な考え方や表現力が不足
- ・複式指導の難しさ
- ・教員の仕事の分担が多くなる

質問2 少人数の方が指導しやすいと思う教科、授業は何ですか？

①国語 10人      ②社会 4人      ③算数 16人

④理科 10人      ⑤生活科 4人      ⑥音楽 4人

⑦図画工作 20人      ⑧家庭 14人      ⑨体育 2人

⑩道徳 3人      ⑪特別活動 1人      ⑫総合的な学習の時間 5人

※「すべての教科において個別の指導はしやすいが、集団での練り合いができない」というコメントがあった。

質問3 少人数では指導しにくいと思う教科、授業は何ですか？

①国語 11人      ②社会 5人      ③算数 4人

④理科 3人      ⑤生活科 3人      ⑥音楽 18人

⑦図画工作 2人      ⑧家庭 2人      ⑨体育 28人

⑩道徳 9人      ⑪特別活動 12人      ⑫総合的な学習の時間 9人

質問4 離島で、教材・教具に関して不便だと感じることがありますか。

①ある 20人

②ない 11人

※①あると答えた人は、どのような時にそう感じますか。

・教具を購入する時

a 購入する場所（業者）がない 15人      b 購入する時間がない 6人

c その他

- ・欲しい時にすぐ買えない    ・教具の種類が少ない
- ・購入する予算が不足    ・教材研究をする時

a 参考文献がない      6人      b 研究仲間がいない      2人

c その他

- ・特に複式において時間不足を感じる。子どもが少なくても教材研究は2倍
- ・校務が多く、時間がない

質問5 離島の環境で子どもたちにとってメリット、デメリットだと思うところは何ですか？

(メリット)

①自然環境      23人      ②ゲームセンター等があまりない      9人

③その他

- ・地域及び家庭の教育力が高い

- ・地域との関わりが深い(地域で育てる気持ちが強い)
- ・地域交流が図り易い
- ・地域の方の温かさ
- ・地域全体で子どもを育てようという意識があり、子どもが素直に育つ
- ・人と人との結びつきが強い

(デメリット)

- ①交通の便が悪い 18人                      ②科学館等の施設が少ない 25人

③その他

- ・病院がないのが困る
- ・多くの人と接する機会が少ない(限られた言語環境)
- ・自然はたくさんあるが厳しい環境で子どもたちが自由に遊び回れる場が少ない。
- ・スポーツ活動、文化活動など、自分がやってみたいと思ってもチャンスに恵まれていない
- ・近所に友達がない

質問6 どんな時に地域の協力が必要だと感じますか？

- ①運動会等の学校行事 29人                      ②総合的な学習の時間等の授業 23人

③その他

- ・学校環境の整備
- ・登下校時や休みの日等の地域の人々の見守る目や地域行事でのお世話

質問7 授業や行事などで、地域の方々の協力を得て、あるいは地域の環境を生かして教育を行っていることがあれば教えてください。

- ・野菜作り・磯体験    ・釣り体験(釣り大会)    ・郷土料理を作る(総合・家庭), 魚料理
- ・郷土料理を生かした生活科    ・総合におけるイモ栽培活動(イモの苗をいただく)
- ・総合学習において地域の人にインタビュー    ・島内清掃活動    ・デイキャンプ
- ・総合で太鼓の指導をしてもらっている    ・そばづくり(総合)    ・ゲートボール大会
- ・郷土歴史家の方をG Tに招く    ・道徳や総合的な学習の時間のG T
- ・総合的な学習の時間における地域探検    ・文化祭への出品
- ・運動会(地域, 学校, 保育園を含めた島全体の行事という形式で行われている)
- ・卒業式の手伝い    ・地域のお年寄りとグランドゴルフ大会    ・デイサービス訪問

※アンケート回答結果について

問1の(メリット)において、「指導に手がかからない」という項目は4人しか選んでおらず、小規模・少人数だからといって手がかからないわけではなく、少人数は少人数なりに教師の指導が容易でないことが窺えた。

問2の「少人数の方が指導しやすい」の項目で、図画工作や算数が多い結果となった。また家庭や理科と答えた教師も比較的多く、実験や技能的な指導が必要になってくる授業においては少人数の方が指導しやすいと感じているようである。

問3の「少人数では指導しにくい」の項目で、体育や音楽が多い結果となった。体育は、個人競技は良いが、団体の競技になると行うことができないため



あろう。音楽では、合唱や合奏が難しいということであろう。

問4について、「ある」と多くの教師が答えた。具体的には「教具を購入する時に「購入する場所（業者）がない」という指摘である。不足教材をすぐに補うことができないなどの、とっさの対応が取れない不便さがあるのだろう。

問5について、メリットとしては地域の方々との親密な関係にあると感じている教師が多いことが分かった。デメリットに関しては、「科学館等の施設が少ない」を選んだ教師が多く、この件に関しては学校として何らかの対応を採るべきだと考える。児童科学館的な展示物を校内に備えるなどの対応を緊急にして欲しいものだ。

問6については、「運動会等の学校行事」「総合的な学習の時間等の授業」の項目を選んだ教師が多く、学校においてこれらの行事における地域の協力はかけがえのないものだと考えているようだ。特に運動会では、学校区内の老若男女の住民全員が集う異年齢交流の場となっており、そこに住む人々の肌が触れ合う場として捉え地域の全体の輪を持続するために必要な行事であると教師は考えているようだ（新上五島町立WT小学校の運動会の前後1週間ほど教育支援に入った経験より）。

問7では、各学校と地域連携の様々な取り組みがなされていることが分かった。

年齢の高いお年寄りとの交流も多く行われている。地域の子どもを見守る地域の方々の目が必要だと感じている教師が多い。この役目はお年寄りの方々をお願いできるだろう。

この調査結果を検討してみて、まず教師自身が離島の環境をプラス思考に捉えるべきであると考え。教師がプラス思考で教育に当たれば、子どもたちに島がもっている沢山の素晴らしさ感じ取って自信に満ちた学校生活を送ってもらえるようになると思える。また、子どもたちの成長する姿に感動して、自分を成長させることができる教師こそが本当の教師であると考えれば、離島はプラス思考の教師を育てるに最適の教育環境であると考えられはしまいか。離島が社会を背負う教師を育ててくれると！

以上のような状況に離島の教育実践現場にいる教師が置かれていることから、今、将にその島の教育のデメリット部分を補う具体的な提案が教員養成の過程の中に求められていると考える。

## 6 1週間(2009年9月)の離島教育支援現場(新上五島のWT小学校)の体験から

### 6-1 情報メディアの活用について

5年生の社会科の授業において、工場で自動車が生産されている様子を、情報機器を用いてスクリーン映像で紹介していた。離島には、工場や店、警察署や消防署など社会科の授業で取り扱うものが学校の近くにはないものが多い。このような環境において子どもたちの理解を深めていくために、ビデオやパソコンなどの視聴覚メディアを駆使することは大切だと感じた。その他、理科や社会科の授業で取り扱う教材は、実物を見せることが難しい場合がある。近くにはないから教科

書の説明のみで済ませてしまうのではなく、日頃から様々な映像・教材などを準備しておくことが離島教育では必要であろう。

## 6-2 異年齢間の交流について

異年齢間の交流は日常の中で常に行われている。毎日の登下校の時、多くの子どもはバスや船を使っている。地区ごとに子どもたちは登下校している。その中で異なる学年の子どもとも交流する機会がある。学校内の掃除の時は、1年生から6年生の縦割り班活動による共同作業で行われる。掃除に来ない児童を班の6年生が呼びに来るという場面を何度か見掛けた。3月の卒業を控えた6年生とのお別れ会の時、全校の児童主体でこの会が行われていた。5年生以下の在校生が6年生一人一人との学校生活の思い出を述べていた。日頃から異年齢間で交流ができていからこそできる活動である。

島の子どもたちの活動の多くは集団的である。この中から複雑な人間関係を構築していく力を養い、集団的社会的な能力を形成する基礎となつて、現実の社会に対応していくための基礎的能力が形成される。しかし、最近では子どもの数が減り、近所で子ども同士が遊ぶことが減ってきている。島の行事のときや学校での異年齢集団による活動は、島の地域活動発展のために今後ますます重要になってくると考える。

## 6-3 6年生のリーダーシップについて

1週間の教育支援に入った時期はちょうど運動会シーズンであった。この小学校では運動会の応援合戦の練習は児童だけで行っていた。紅組と白組に分かれ、6年生がそれぞれの集団を引っ張って練習を行っていた。応援合戦の内容や方法も自分たちで考えて行っていた。練習の中で、6年生による下学年の子どもたちに対する指導の仕方は、単に歌や振り付けを教えていくだけでなく、注意したり褒めたりしながらリーダーとして練習を進めていた。日頃からの他学年の児童との触れ合いの中で、最高学年であることを6年生たちが強く意識し、リーダーシップを持って行動できていた。

## 6-4 地域・保護者の協力について

運動会前日に保護者に呼びかけて、テント運搬などの準備が行われていた。運動会当日は、保護者だけでなく地域の人も参加する運動会となった。子どもが既に学校を卒業した方々も自由に参加しており、最初の入場行進の時から地域の方々も一緒であった。子どもたちは人数が少ない分、参加種目や係の仕事で忙しく、子どもたちだけでは運営が難しい。保護者や地域の人々が参加しているお蔭で運動会が成り立っていると感じた。運動会終了後には会場設営と同様に、保護者が片付けまで手伝ってくれていた。

## 6-5 運動会について

運動会当日は、運動場には大漁旗が飾られ、地域ごとの対抗種目があり地域の運動会という雰囲気であった。また、幼稚園児(4人)も参加していた。児童数が少ないため子どもたちは出場する種目が多く、役割や任務も一人あたりの仕事量は多い。出場種目の多い子どもたちはじっくりと応援をする暇もない状況であ

った。

運動会に参加して少し気になったことを紹介したい。それは競技をしている子どもたちに対する声援が少し小さいと感じたことである。この小学校はもともと幾つかの小学校が合併して今日に至っている。このため地域の区域が違って、面識のない子どもたちがいるからではないかと思った。そこで、せっかく運動会に来て参加してもらっているのだから、地域の人と子どもたちが交流できるように、保護者も地域の方々も子どもたちも一緒になって参加できる種目・競技を増やすことなども、一考に値すると思った。

## 7 離島だからこそできる教育

### 7-1 へき地・小規模校教育の可能性について

離島・へき地・小規模校では教員がまず、教育上の利点や地域の良さを生かすこと、離島でできることの可能性を探っていくこと、そうしようとする姿勢を持つことが大切なことである。地域社会の活力を支える重要な一翼を担う教員集団の役割は大変大きい。地域の核となり得て、地域の土壌中に次世代を担う種となる人材を育成していく責務が認知されている。教師に活躍する場が与えられ、これに呼応する教師の出現があるならば、地域の方々の地域社会に対する思いと重なり、同調してその想いの波は大きくなりそして周囲へと伝播するに違いない。

文部科学白書から見た現代的・政策的な課題とへき地・小規模校教育の可能性を学校運営、学習指導・学力の向上、体験活動、総合的な学習と地域づくり、生徒指導・社会関係づくり、生活指導などについてまとめた優れた報告<sup>8)</sup>がある。是非参考にしてもらいたい。

### 7-2 新上五島町若松地域の素材の活用方策について

新上五島町の日島、曲地区には中世以後に建てられた石塔群(長崎県指定文化財)が約70基ある。この石塔群の近くに建てられた看板には、この石塔群の価値について「現段階では日島の歴史については不明の部分が多く、古文書上の関係記述からも石塔群を建塔した直接の背景を探ることはできない。ただし、日島石塔群の主体をなす中央形式塔の在り方は九州さらには日本列島全域からみた石造美術史上は無論のこと、時期的に想定される「倭寇」の問題を考える上においても重要な示唆を与えている。現在の一離島に、全国的に見ても大規模な石塔群が集中していることは、活発な海上交易で栄えた日島の輝かしい時代を彷彿させると共に学術的にも非常に価値の高い史跡である。」と記されてある。日島の石塔群などの遺跡の見学や観察を歴史学習として授業へ取り込めば、島の子どもたちに我が郷土についての誇りと自信をもたせることができる。

新上五島町の海岸は深く入り組んでおり、様々な漂着ゴミが打ち上げられている。中にはハングル文字の書かれたものなどもあり、様々な場所からゴミが集まってくるのが窺える。単なる環境学習だけでなく、国際理解も含めた学習に発展できる。

### 7-3 地域人材マップの作成について

限られた社会環境の中に在る学校にとって、地域の人材は実に大切なものである。その人材を学校教育に有効に活用するためには、地域人材マップの活用は重要である。PTAや町内自治会の協力を得れば容易に人材が「発掘」できる。だがそれは地域からの一方的な情報であって、学校に必要な情報が埋もれている場合もあるであろう。重要なのは、地域に内在する資源を、教師自らが自らの手で発掘することである。また、教育の幅を広げるために、地域外あるいは島外の人材を加えることも必要だと考える。

#### 7-4 五島列島の名産物を生かした理科学習の提案

ここでは五島列島の名産物のかんころもち作りを、6年生を対象とした授業で取り上げることを提案したい(表5)。地域の方々に授業に関わってもらい、地域の方々と関わる中で人と関わる力や表現力を身につけさせたい。また、理科などの教科との関連を見つけて、子どもたちの地域の名産物への興味関心を高めるきっかけとしたい。

##### 7-4-1 「かんころもち作り」の年間計画

年間を通して人と関わる力を育むことを目的に、さつまいも栽培の場面だけでなく「かんころもち作り」発表の場面に至るまで地域の方々に参加協力してもらい、コミュニケーション能力が低いとされる島の子どもたちの表現力を高める活動として取り組ませたい。この活動を通して地域について知り、自然と触れ合いながら郷土を愛するところを育てたい。また、これらのかんころもち作りの折々の活動を地域住民と一緒にやって取り組むことにより、地域力のパワーアップと地域力の保持発展にも貢献できると考える。実例として、五島市立奥浦小学校(僻地1級地)では全児童が保護者や教員のサポートを受けて、この「かんころもち作り」に取り組んでいる<sup>9)</sup>。

表5 「かんころもち作り」の年間計画 (対象学年 第6学年)

月	活動内容(かんころもちをつくろう)	主な学習のねらい
4月	○かんころもちについて学ぶ ・かんころもちの作り方を調べよう ・さつまいもの育て方について調べよう	○地域の名産物について知り、郷土に対する知識と愛情を深める
6月	○さつまいもを育てる (地域の方々の協力を得て行う) ※種イモを植える時期は、3月末から4月初め頃なので、事前に苗は準備しておく ・イモの苗を刈り取る ・イモの苗を植える ・草取りをする ・成長の様子を観察	○理科のB生命・地球の内容植物の発芽、成長、結実と関連して学習を行う  ○技術・道具などの面で地域の方々の協力を得ながら、地域の方々との交流を行う
11月	○さつまいもを掘り出す ○かんころを作る ・さつまいもを輪切りにして茹で、乾燥	○家庭科の学習と関連させて活動をする

1月	<p>させる (1週間程度)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○さつまいもを使った料理を作る</li> <li>○さつまいもからでんぷんを取り出してみよう</li> <li>○かんころもちを作る <ul style="list-style-type: none"> <li>・乾燥させたかんころもちと一緒に蒸す</li> <li>・蒸したものに砂糖を加え、もちをつく(ごまや生姜などを入れてもよい)</li> </ul> </li> <li>○かんころもちを食べ、発表をする <ul style="list-style-type: none"> <li>・他学年にも食べてもらい、今まで学んできたことを発表する</li> <li>・協力いただいた地域の方にも発表を聞いていただく</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○理科のB生命・地球の内容で取り扱うでんぷんと関連させる</li> <li>○地域の方にも参加していただく</li> <li>○発表の場を設定することで、表現力を養う</li> </ul>
----	---	---

上の「かんころもち作り」の年間計画の中で、さつまいもからでんぷんを取り出す学習内容を取り入れた。この内容について、具体的に理科学習の中で「さつまいもからでんぷんを取り出す」場面を想定し、下に授業指導案を表6に示した。

#### 7-4-2 理科学習指導案「さつまいもからでんぷんを取り出す」

○学習のねらい：「かんころもち作り」と理科の学習との関連を考える

自分たちが育ててきたさつまいもにも、以前に理科で学習したでんぷんが含まれていることを知ることで、学習内容への興味関心を高める。

表6 学習内容指導案「さつまいもからでんぷんを取り出す」(対象学年 第6学年)

過程	学習内容	支援・留意点
導入	○第5学年の理科の学習における種子の中の養分がでんぷんであったこと、第6学年理科の学習で植物の葉に日光が当たるとでんぷんができること、を振り返る。	○過去の理科の学習と関連させる。
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>○種子ではなく、種イモ(塊根)から発芽するさつまいもにもでんぷんが含まれているか考える。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・発芽するので、児童はでんぷんが含まれていると考えるだろう。</li> </ul> </li> <li>○さつまいもには多量のでんぷんが含まれていて、デンプンの原料となっていることを教える。</li> <li>○さつまいもにもでんぷんが含まれているが、どうしたら確かめられるか考える。</li> <li>○考えを発表する <ul style="list-style-type: none"> <li>・絞り出す。</li> <li>・ヨウ素を使う。</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○さつまいもは根の一部が肥大し、塊根となっていること、その塊根から発芽することを、さつまいもの成長を観察してきたことを思い出させながら伝える。</li> <li>○でんぷんは一度熱を加えた方がヨウ素と反応しやすいことに注意する。</li> </ul>

<p>まとめ</p>	<p>○さつまいもをすり潰してでんぷんを取り出す。          ・さつまいもをすり潰し、さらしで包んで水につける。          ・その水をしばらく放置しておく。          ※沈殿するまでに2時間ほどかかる。          ○でんぷんが沈殿する様子を、事前に準備したものをを使い、時間経過とともに見る。          ○事前に準備していたでんぷんを一度加熱したものから、ヨウ素液で反応させて確かめる。          ○さつまいもでは、葉で作られたでんぷんが根(塊根)の部分に蓄えられていることがわかる。</p>	<p>○授業時間内では沈殿し終わらないので、休み時間等の時間を使って確認する。          ○でんぷんが沈殿しきつたものを準備してく。          ヨウ素でんぷん反応</p>
------------	--	---

この授業では、理科のB生命・地球の分野における学習内容に関連させている。第5学年では、植物は種子の中の養分を基にして発芽すること、その種子の中の養分としてでんぷんについて学んでいる。第6学年では、植物の葉に日光が当たるとでんぷんができることを学ぶ。これらの学習で学んだでんぷんを、自分たちが育てたさつまいもから実際に取り出して観察することを通して、生命への興味関心を高めることを目指している。

### おわりに

教員養成の過程において、へき地・小規模校での実習経験は貴重である。本学部においては3年ほど前から蓄積型体験実習の中に離島実習を組み入れ、年に数十名の学生が離島の小規模な学校で教育実習を行っている。この離島実習に参加した多くの学生から、地域ぐるみで行われている素晴らしい離島実習の様子を聞くにつけ、県内各地の離島教育実践がどのように行われているか興味があった。

そこで、離島教育の素晴らしさを体験するために、独自に母校の新上五島町立WT小学校(僻地1級地)と交渉し、教育支援の名目で受け入れてもらった。ここで行った教育支援実習の経験が本報告の基礎となっている。離島の子どもは消極的だという意見をよく聞いていた。しかし、平成21年内にWT小学校へ3回に亘って教育支援に入ってみて、一概にそうとは言えないと実感した。運動会も理科の授業(2回実施)も、児童はとても積極的に活動に取り組んでいた。地元育ちでありながら余りに止めていなかったことが、違う立場で離島教育を見たとき、地域の密な人的関係の中に教育環境があり、地域の力を存分に発揮できる素地が島には沢山残っていることを確かめることができた。

離島での教師を目指す者として、これからの課題は積極的に地域と関わり地域住民と密な関係を築きながら、地域を知り地域素材を教材として活用できる力を身に付けていくことであると感じている。これらのことの1つ1つが、地域の次世代を担う子どもの育みに大きく影響すると心しなければならぬと、思っている。日本型雇用制度が崩壊しつつある現在、荒廃が進み希望が持てない大都会よりも、農山漁村の生活を求める声は潜在的に多い<sup>10)</sup>。これに呼応して、ふるさと

と回帰運動が官民ともに活発になってきた。若い芽が根付く素地が整えられつつある現状で、離島教育に携わる教師の力量が今問われている。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々にご協力とご指導をいただきました。特に、離島教育に対するアンケート調査にご協力していただき、貴重なご意見を賜りました離島教育に携わっておられる小学校の先生方、また、私を一週間教育支援で受け入れてくださった新上五島町立WT小学校の先生方・職員の皆様、児童の皆様に御礼申し上げます。

最後に、大学まで進学させてくれた父母、中五島高等学校で大学進学を熱心にサポートしてくださった先生方に感謝いたします。(松園光代)

## 参考文献・資料

- 1) 国土交通省ホームページ <http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/ritoutoha.html>
- 2) 長崎県ホームページ <http://www.pref.nagasaki.jp/sima/new/images/10.pdf>
- 3) 佐伯重幸・猪山勝利編、『現代離島教育の構造と展開—長崎県上五島地区を中心として—』長崎大学教育学部，平成2年
- 4) 長崎県統計課ホームページ 統計キッズ  
<http://www.pref.nagasaki.jp/toukei/index.html>
- 5) 森下浩史，岩永祥子，市瀬智嗣，長崎大学教育学部紀要 教科教育学，  
No.40, 1 (2009)
- 6) 長崎県地域振興部ホームページ <http://www.pref.nagasaki.jp/chiiki/index.php>
- 7) 『新しい時代の要請に応える離島教育の革新—長崎大・鹿児島大・琉球大三大  
学共同研究から—』長崎大学教育学部，平成19年
- 8) 玉井康之著，『子どもと地域の未来をひらく へき地・小規模校教育の可能性』教育新聞社，p135，2006年，
- 9) 「ついで丸めて手作り体験」長崎新聞，2010年1月23日
- 10) 「希望は農山漁村にあり」長崎新聞，2010年1月9日